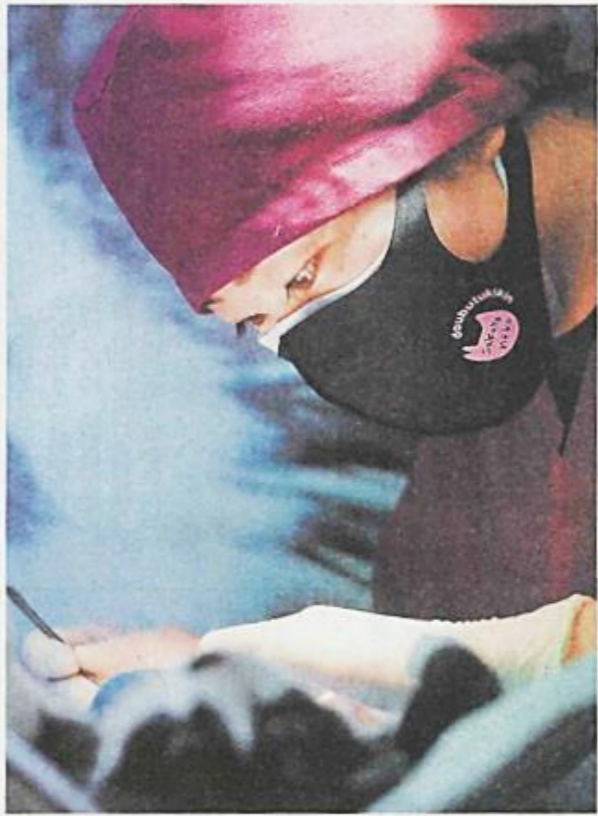


真剣なまなざしで猫の避妊手術を行う獣医師



耳にV字の切り込みを入れられる。形状から「まぐらねこ」とも呼ばれる

に運び、スタッフとして処置にも携わる。筑後市では1月までに当初目標の2千匹を達成。目標を3千匹に引き上げた。



取材に訪れた日、会場では神奈川県から参加した獣医師山口武雄さん(73)が若手の執刀を指導していた。「手術は『まぐらねこ』これじゃまだ合格とはあげられないね」

どうぶつ基金は全国の動物病院179カ所と協力し、各地の保護団体が捕獲した猫の避妊去勢手術費用を負担。毎年数万匹に手術を施している。今年4月に始めた野良猫を1カ所に集めて一斉に手術を施す事業は、一定の条件を満たす地域を毎年選定し、1年間実施する仕組みだ。今年度は福岡県筑後市のほか、宮崎市と大阪市が選ばれた。

毎月、連続した4日間を手術日として避妊去勢手術に取り組む。「避妊去勢は動物愛護の第一歩」。そう話す山口さんの技術は他の獣医師から「神の手」と

地域で愛される存在に

命のためにできること



全国で殺処分される猫は毎年数万匹に上り、その6割を手術が占める。この不幸を止めるため、公益財団法人「どうぶつ基金」(兵庫県)が今年、野良猫に避妊去勢手術を施して地域に定着する事業を福岡県筑後市で始めた。毎月4日間、県内外の保護団体が捕獲した猫を会場へ運ぶ。その数、1日に100匹を超えることもあるという。現場を訪れた。(文・竹添そら、撮影・穴井友樹)



「神の手」と呼ばれる山口武雄獣医師(左)。技術を学ぼうと全国から若手が集う

「神の手」に学ぶ 若い獣医師たち

たたえられる。避妊はものの数分、去勢に至っては1分もかからない。師事する獣医師は多く、一斉手術の会場もさながら「山口道場」だ。若手たちはわずかも時間が空くと、その手さばきを食い入るように見つめた。この日は宮崎市の「宮崎ねこの会」代表が来年度の事業継続を求める地元市長らの要請書を持って駆けつけた。会場は各地の団体が交流する場でもある。2011年から基金の活動が先行する大阪府内では行政が引き取る猫が8割近く減ったという。活動資金は全て寄付金でまかなわれる。佐上邦久理事(61)は「手術すれば殺処分はもうろん野良猫そのものが減っていく。鳴き声も減る。彼らを地域に愛される存在にしたい」と話した。

124匹 一斉に避妊去勢

「どうぶつ基金」が筑後市で

る安定剤を注射し、きょうだ麻酔剤を打つ。続いて抗生剤を投与。雄は睾丸を、雌は下腹部の毛をそって消毒する。雌は尿も絞り出す。この日は体中のシラミが湧きノミが跳びはねるブチブチという音もした。捕獲された猫は衛生車に積み込まれ、運ばれた。猫は尿も絞り出す。この日は体中のシラミが湧きノミが跳びはねるブチブチという音もした。捕獲された猫は衛生車に積み込まれ、運ばれた。



手術を終えた猫に顔を寄せ、ボランティア。「気をつけて帰ってね」と声を掛けていた



全ての処置を終え、捕獲された地域へ向けて運ばれられる猫たち

「どうぶつ基金」の活動は、全国的に広がっている。各地で捕獲された猫は、会場へ運ばれ、手術を受ける。手術後は、ボランティアの手でケアを受け、元の地域へ返される。この活動は、猫の命を守るだけでなく、地域社会の絆を深める役割も果たしている。